

—村史こぼれ話9—

風呂たて番（湯たてばん）

現在では各家々に風呂が完備し、「もらい風呂」をする風習は見られなくなりました。しかしながら、お年寄りが集まるとこの習慣を懐かしむ声を耳にします。かつての「湯組」はそのまま現在の「隣組」として残っているところもあります。

「共同風呂」は全国的に見られますが、その形態はさまざまです。村でも麓や矢作・大戸をはじめとする農村地域に多く見られました。隣近所で「湯組」を作り、風呂をたてる番の家に行って「風呂もらい」をしました。弥彦本村ではきまった家や旅館の風呂をもらう「もらい風呂」が多かったようです。このほか、吉田町や分水町では「共同浴場」を設け、集落が共同で維持管理したところもありました。

「当時17軒くらいあったので、三つに分かれてお風呂をもらいに行った。夕方子どもたちが『湯がたったすけ、入りにきてくらっしえい』とふれて歩いた。世間話などして、11時頃までいた。大きな囲炉裏の中に木を燃やし、時間のたつのも忘れるくらい、どんな些細な事でも話題になった。今と違い隣近所の親睦があった。」

（『弥彦郷土誌』第8号 弥彦村の食と暮らし—中山の年中行事と食生活—より）

その後、巻保健所あてに村民が投書したことがあり、当時の「館報やひこ」に次の記事が載っています。

「…小さな一人風呂に順々に50人から6、70人が入るわけです。夜の10時11時頃までかかって、よく見ると臭くて、汚くて、タメ水のようなのです。これでは体をきれいにするのはどっちだか分からない始末です。…伝染病などどんどん広がります。…」

（昭和36年6月1日付「館報やひこ」より）

今と違って風呂場の電灯は薄暗く、お湯も充分ではない頃で、「風呂桶の中で手ぬぐいを浸して身体を洗うのは止める」など守るべきことが同時に館報に載せられています。まだ赤痢や疫痢、結核など伝染病が多発していた時代でもありました。

衛生面で批判されたことがきっかけとなったかは不明ですが、「湯たて番」はその後次第に姿を消していきました。高度経済成長が拍車をかけたのかもしれませんが。